

柿の木とともに

阿曾 哲子 福島県郡山市 五十四歳

雪解けの頃、冬芽は芽吹き、力強く春を迎える庭の木々たち。その庭の真ん中に大きな柿の木がある。秋になると父が脚立に上り柿をもぐ。自転車の後ろに幼かった私を乗せて、どんなに風が強くても、きゅんきゅんと漕いでいたときの、私が強くしがみついていた父の背中が、今でもやっぱり広くて大きい。「危ないから、もう上の方はいいから」、そんな私の言葉にも、「大丈夫、大丈夫……」と。あの遠い日の父よりも、今の私はずっと年を重ねているのに、父はいくつになっても、私がいくつになっても、父は父であり、私は娘である。年々幹が太くなっていく柿の木の下で、いつまでも変わることがない時の流れがそこにある。「このぐらいあればいいか」と、急に大きな声が聞こえてきた。その声がなんとも私の息子にそっくりで、それを父に伝えたら「俺が似ているのではなく、あいつが俺の声に似ているんだ」と、その顔は少し嬉しそうだった。「来週、また柿を獲りにくるから、あいつに手伝うように言っておけ、上の方は獲ってもらわないと」って、とても嬉しそうなの顔は、私の顔にもよく似ていた。冬になれば、木守りの実を残した枝にも雪が積もり、またこの木も春を待ちつつ深い眠りにつく。次の雪解けの頃には、柿の木はひとつ年輪が増える。父も私も、そして父や私にもよく似た息子もひとつ年を重ね、柿の木とともにあるこんな穏やかなひとときもまた、ひとつ増えていく。